朝日選書
422

駒尺喜美

紫式部のメッセージ

駒尺喜美著

紫式部のメッセージ

駒尺喜美（こましゃく・きみ）
1925年，大阪生まれ。元法政大学教養学部教授。専攻近代日本文学，女性学。現在は株式会社「わかったぷらんにんぐ」スタッフの一人として「ウーマンズ・スクール」の文学講座を担当している。
〈主な著書〉
『高村光太郎』（講談社現代新書），『漱石という人』（思想の科学），『雑民の魂』（講談社文庫），『女を装う』（径草書房，共著）『魔女の論理』（不二出版）

紫式部のメッセージ　　朝日選書　422

1991年3月20日　第1刷発行

著　者　駒尺喜美
発行者　木下秀男
印刷所　共同印刷
製本所　和田製本
発行所　朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2 電話03(3545)0131(代表)
編集・図書編集室　販売・出版販売部　振替・東京0-1730

©K. Komashaku 1991 Printed in Japan 装幀・多田進

ISBN4-02-259522-1

定価はカバーに表示してあります

紫式部のメッセージ・目次

序章　紫式部へのメッセージ　1
拝啓　紫式部様　3
一章　紫式部という人　9
『紫式部集』　11
『紫式部日記』　26
式部は同性に愛を感じていた　42
二章　『源氏物語』の主人公たち　49
桐壺の巻――動機と主題の提示　51
光源氏――ハイ・ティーン時代の乱行　68
空蟬――賢明な女　73
夕顔――自己主張しない女　84
紫の上――アイデンティティ喪失の悲劇　107

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

三章　宇治十帖の必然性　155
宇治十帖の意味　157
八の宮――母親のような父親像　160
大君――結婚しない女　169
中の君――大君の危惧の体現　183
浮舟――受け身の拒絶　193
あとがき　223
参考文献・系図　227

図版・吉沢スタジオ

序章　紫式部へのメッセージ

拝啓　紫式部様

あなたの深い声を聞きとるまでに、わたしはずい分長い間かかってしまいました。世間に満ちあふれている『源氏物語』に対する高い評価のために、皮肉にもあなたの声がかき消されて、なかなか届かなかったのです。

『源氏物語』があまりにも広くて深い、重くて大きい物語なので、初めは〈女・子ども〉の読み物として軽んじていた男たちをも、次第にひきつけてゆきました。読めば読むほど味わい深いので、彼らはこぞって賛辞を呈したのでした。そして今日に至るまで、微に入り細を穿って論じられ、研究され続けて、いつの世にも賛歌が鳴りひびいてきました。

しかし、これははっきりいって、あなたにとって一つの不幸でした。むろん、男たちが評価しなければこのように世界の名作という高い地位を得られなかったことは確かですが、その代償として、解釈はどうしても男の側からの思い入れに傾いてしまいました。男のための恋の手引き書と勘ちがいされたり、さまざまな恋をしたいという男たちの欲望をいやが上にもふくらませる方向で読みつがれてしまったのです。

あなたの「物おもひ」と無縁のところで、やれ雅びやかな恋だの、理想の男性だなどと、喧伝されてしまったのはともかくとしても、女の手本として嫁入り道具の一つに飾られることにまでなったのには、失笑してしまいます。

なるほど、女子教育のためにとは、あなたのお気持ちにもあったこととは思いますが、その意味はまるで反対だったはずです。あなたの書かれたものの中に、もしかりに、教育とか教訓とかが潜んでいたとしても、それは世間に横行している〈結婚幻想〉を信じなさんな、ということであったに違いないのです。どんなに高貴な男、やさしい理想の男であっても、いや理想の男ほど罪深いものだ、という教訓だったと思うのです。あなたの心の底深くにあったモチーフは、相手が考えられぬほどの理想の男性であったとしても、結局のところ女は不幸になる、泣かされるのだ、という思いであったと、わたしは思うのです。

ところが、男たちは結婚の幸せを否定する女の存在など想像もつかず、女はみな好色な美男子、地位あり才ある男にあこがれるものだと思い込んでいるので、『源氏物語』に登場する女たちの苦悩は、華やかな恋にそえられたワサビだぐらいに受けとってしまったのです。

これはとりもなおさず、あなたの仕掛けた巧妙なトリックにはめられたということなのですが、「光源氏」はいやが上にも光り輝く男として、男にとってはもちろん、女にとっても理想の男性として肯定されてしまったのです（多少のキズはどんな男にもありますから）。そして、自然に男女の愛の機微、情愛の種々相を描きつくした物語というあなたの本意とは逆の賛美の潮流が形づくられて

しまったのです。このような逆の方向から『源氏物語』を読むので、たとえば「帚木」の冒頭、

光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、かろびたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ、語り伝へけむ人のもの言ひさがなさよ。

や「夕顔」の結語の部分、

かやうのくだくだしきことは、あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくて、みなもらし止めたるを、「など帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほならず物ほめがちなる」と、作り事めきてとりなす人ものしたまひければなん。あまりもの言ひさがなき罪避り所なく。

の真意がまるで読みとれないのです。

学者たちが、「理解に苦しむ」、「難解だ」、「謎だ」と首をかしげているあそここそが、あなたの地の声であり、あなたの真意を語っている部分なのですよね。

どのように理想的に見える男も、女の知らぬ所でひどいことをしているのだということを、分断されて家の中に囲いこまれている女たちになんとか伝えようとして、さりげなく、しかし、はっき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

り「地の文」として――ということはあなた自身の声として――ちゃんと書きつけていらっしゃったのです。物語ではどんなに華麗で幸福な結婚であろうとも、女の幸せは常に不幸とだき合わせになっていること、身分の高い女は高いなりに、低い女は低いなりに、それぞれ苦しむという情景を、見事に展開されていたのでした。

このあなたの態度は、『源氏物語』の始めから終わりまで一貫していて、むしろ明快なのです。しかし〈コロンブスの卵〉ではありませんが、ポイントに気付かぬとなると、難解なものです。もっとも、男たちや世間から全く憎まれては元も子もないわけですから、あなたは万全の心遣いをし、物語を玉虫色に染め上げ、どうにでも読めるようにしておられるので、あなたの真意はなかなか伝わらなかったのです。

それはそうと、『源氏物語』の親とされた『竹取物語』を、あなたは強く意識していらっしゃいましたね。『竹取物語』は、結婚拒否（あるいは遁走）を、正面に打ち出していたわけですが、あれは、月の世界の女という設定なればこそできた夢物語です。しかし、あなたは地上に物語をすえて、女と男の関係性、男女関係の力学をあますところなく描き尽くそうとした。そしてその結果として、この世においての男女関係の力学では、結婚と幸せの同居は不可能なことを浮かび上がらせたのだと思います。

ともあれ、あなたが「心に籠めがたくて」、壮大な物語に託してわたしたちに伝えたかったもの、それを受けとめるまでに、人々はずい分まわり道をしてしまいました。いや、人のことをいえた義

理ではありません。わたし自身も、宇治十帖を異質な世界とする読み方から容易にぬけられませんでした。つい最近に至るまで、あなたのリアルな目がだんだん深まってきて、そこであのような、結婚拒否の世界にまでゆきついたのだろう、と考えていたのでした。もちろん、書き進める中であなたの考えがだんだん深まってきたことも事実でしょう。しかし、あなたのモチーフは秘められていたにせよ、始めから一貫していたのです。

光源氏の一代記として、「品変りたる恋」のパノラマを展開してきた物語が、突然、宇治十帖の暗い世界に入るということではなく、さまざまな男女の結びつきを追いつめ煮つめていった必然の結果としての宇治十帖であり、あの結末であったのです。

それを理解したのはごく最近です。そして、それを理解したとき、わたしの身も心も震えました。

紫式部様。あなたは一千年早く生まれすぎました。あなたのメッセージがわたしたち凡人の耳に届くには、千年もかかったのです。

ですが、御安心下さい。今ようやく、歴史が急転回して、あなたの真の声を聞き分けられる時代に入りました。大学の卒業論文で「空蟬（うつせみ）」をとりあげ、それを強姦の物語だと正しく指摘したわたしの知人もおります。また、男の研究者の中にも、おずおずとではありますが、光源氏が強姦者であるといい出した人もいます。

今、この社会ではセクシャル・ハラスメントが論議されつつありますが、ここまで歴史が動いてはじめて、人々は女の立場に立って考えることができるようになったのです。

とはいえ、まだまだ『源氏物語』の従前の確立された評価を逆転させ、あなたの真のメッセージの偉大さを世間が認めるには時間がかかると思います。が、どうか絶望しないで、気長に待っていて下さい。なにしろ、あのように長大な物語なので、そう一どきにはできませんが、今、女たちは、一歩一歩、あなたの方へ歩みつつあります。現代のフェミニズムが、女性学が、あなたの声を、あなたの顔を、少しずつ明確にしてゆくでしょう。

この本は、そのほんのとっかかりです。

一千年前のフェミニストであった紫式部様！

あなたがよしんばどれほどの才能に恵まれていたとしても、女の全体的状況の把握とそれへの深い悲しみと苦悩がなければ、決して『源氏物語』は生まれていなかったでしょう。少なくともあの形では生まれなかったでしょう。個々の女の苦悩を、女に共通の苦悩の中に位置づける感性と力がなければ、すなわち現代流にいえば、フェミニストの目がなければ、あれだけの物語は生まれなかったでしょう。

わたしをこの確信に導いてくれたのは、『紫式部日記』でした。日記が残っていなかったならば、あなたを理解することは、もっともっと難しかったにちがいありません。あなたが一千年前に埋めた地雷が、今爆発しようとしているのです。

紫式部様。ありがとう。熱い熱い握手と抱擁をおくります。わたしは今、あなたに出会えた幸せに打ち震えています。

一章　紫式部という人

『紫式部集』

めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにしよはの月かな

この紫式部の歌に接したのは、いつの頃だったのだろうか。古典にも和歌にも縁のないわたしだが、百人一首だけは多少の縁があった。もしこの歌が百人一首に入っていなかったならば、この歌も全く知らなかったに違いない。

幼い頃、お正月には母が顔を輝やかせてかるた取りをした。母は百人一首が好きで、そのほとんどを諳んじていた。読み手が上の句を読み始めるか始めないかに、母は得意そうに体をのり出して、「ハイッ」と札を取ってしまう。おそらく、当時の女の人はほとんど百人一首を諳んじていたのだろうが、わたしには母が特別に頭のいい人のように見えた。頬を上気させて、あはは、あははといかにも嬉しそうに笑う母の姿が目にちらつく。

だが、その母の子どもであるわたしは、いつまでたっても百人一首を諳んじることができなかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook